

序 曲がり角の十四世紀——中世解体の萌芽を探る

中島圭一

かつて松本新八郎が南北朝封建革命説を打ち出したように、あるいは網野善彦が十三世紀後半から十四世紀を「文明史的」「民族的」な転換期ととらえたように、南北朝の内乱期を中心とする十四世紀をもつて、大きな時代の画期と位置づける見方があった。そうした関心は、近年では十六世紀を中心とする中近世移行期へと完全に移ってしまつたように感じられるが、だからこそ今、十四世紀という時期の歴史的位置を見直す必要があるように思われる。

実のところ私自身、十六世紀を挟んだ足掛け三世紀を、中世から近世へと時代が大きく変わっていく長い移行期ととらえており、そうした時代の転換が顕在化する契機としての応仁の乱が勃発するに至つた社会経済的背景を追究してきた。その際、注目したのが、(この時代なりの)大量生産を目指す動きが陶器・石製品・木製品など様々な品目に確認できることで、さらに同様の方向性が農業生産などにも広がっているとみられることから、こうした生産方法の変革が引き起こす経済の変容を、応仁の乱の歴史的前提の一つとして位置づけたのである(拙稿「十五世紀生産革命論序説」『中世東アジアにおける技術の交流と移転—モデル、人、技術』科学研究費補助金(基盤研究(A))研究成果報告書、研究代表者小野正敏、二〇一〇年)。そして興味深いのは、量産化の動きのいくつかが十四世紀後半まで遡ること、やがて中世社会の解体を引き起こすに至る社会変動の起点が十四世紀にあるのではないかと考えるに至つた。

院政期から鎌倉期にかけて形成され、発展してきた政治・経済・社会にわたる中世のシステムが、一つの到達点に

行き着いたのが十四世紀と言つてよいだろう。そしてその十四世紀に、鎌倉幕府が減んで南北朝内乱に突入するといふ形で、中世的な政治・社会体制は曲がり角を迎えるわけだが、最終的に中世を崩壊へと導く動きの萌芽を同じ時期に見出そうとする私見が仮に認められるなら、それは中世的なシステムの発展そのものの中から生まれたと考えられる。また、南北朝の内乱と戦国の争乱とがいずれも中世的システムの動揺・崩壊を示す事象だとすれば、その間に挟まれた十四世紀末〜十五世紀中期の「室町の平和」は、中世的システムの行き詰まりをとりあえず糊塗して、中世的秩序の延命を図つた時代と位置づけられよう。

右のような編者の視点を伝えた上で、各執筆者には十四世紀に対するそれぞれの関心に基づいて自由に論を展開してもらつた。

第一部「台頭する新たな力」には、時代の新しい要素に注目する七本の論文を収めた。

高橋典幸「悪党のゆくえ―莊園領主の動向を中心に―」は、十四世紀半ばを境として「悪党」が史料に見えなくなる事実を取り上げ、その背景に莊園領主や守護による悪党の取り込みと支配体制の変容を見出す。これに対して、海上世界にアプローチするのが関周一「海賊の跳梁と東アジアの政情」で、中世的自由を謳歌した東アジアの「海の勢力」が、十六〜十七世紀に陸の権力の統制下に組み込まれるに至る過程において、一つの面期として十四世紀に注目する。海を越えてやつて来るものの中には学問・知識もあり、川本慎自「禅僧の数学知識と経済活動」は、十四世紀の禅宗寺院における漢学教育に数学・経済・医学・農学などの基礎知識が含まれていたことを明らかにし、それが十五世紀以降の禅宗寺院とその周辺の経済活動の基盤となり、また近世初頭の算学など体系的な学問を準備したと考える。

宗教に目を向けると、湯浅治久「東国仏教諸派の展開と十四世紀の位相」が、鎌倉など都市に誕生した中世仏教諸派が地域での展開を開始する時期として十四世紀を位置づけ、十五世紀における村落への展開の本格化とその後の近

世仏教成立の始点をそこにみる。さらに七海雅人「板碑造立の展開と武士団」は陸奥国南部の白河庄から石川庄にかけての板碑の拡散と終焉を追いつつ、その背景に地域の在地領主の動向を見出し、落合義明「出羽の霊場と武士団」は、出羽成生荘周辺の宗教空間と在地武士や守護との関わりを丁寧な跡づけ、関東の霊場との相違を指摘する。在地領主のあり方とも関わる家の問題では、坂田聡「家論から見た十四世紀」が、近世以降につながる家の形成の起点を、十四世紀の公家・武家から百姓上層における家産と家名の成立に求め、十四世紀～十六世紀末を日本の「伝統社会」の形成期とする。

続いて第2部「創られる由緒と秩序」には、由緒の創出と秩序の再編成に関わる六本の論文を取めた。

五味文彦『中尊寺供養願文』の成立」は、この願文が十四世紀における中尊寺の伽藍復興のため、十二世紀Ⅱ中世初めの由緒を持ち出して創作したものと主張する。これを受けるように、苅米一志「創りだされる神々の縁起」は、十四世紀の戦乱状況の中で、地方神社の檀越として重要な位置を占める武士層に仏僧が接近して「始祖と神との関わり」をアピールするとともに、軍神・武神の性格を強めていき、武士の神格化も進行する様子を描き出す。

武家の世界では、呉座勇一「武家文書の転換点」が、内乱期における文書偽作の盛行と、その背景にある成り上がり者の由緒創出を浮かび上がらせ、所領安堵における由緒の価値の低下によって、この転換期に形成された系譜意識がそのまま後世に継承されていく状況を描き出す。また、黒田智「足利尊氏像と再生産される甲冑騎馬肖像画」は、十四世紀の肖像画の特徴として、祖師に連なる肖像画、祖先や家に連なる肖像画、神仏に連なる肖像画、君臣像の制作と主君の肖像画の所持などを指摘したうえで、十五世紀後半の甲冑騎馬像に注目し、その祖型としての尊氏像と彼の武威に関する言説、そして勝軍地蔵信仰との関連を明らかにする。

室町幕府秩序の形成過程については、まず大藪海「室町幕府―権門寺院関係の転換点」が、十四世紀後半、権門寺院が室町幕府の支配に組み込まれ、朝廷を間に挟まずに直接交渉するようになるのを、足利義満の主体性によるもの

ととらえる。その義満に注目する石原比伊呂「足利義満の笙と西園寺実兼の琵琶」は、秘曲伝授における十四世紀末の義満と十四世紀初頭の西園寺実兼との対比を通じて、笙に関わる義満の行動の非政治性を指摘するとともに、「室町幕府將軍とは、〈武家の長〉と〈前代における関東申次〉の役割を二つながらに兼ね備えた存在だったのではないか」という仮説を提起する。

第3部「広がる富と変わりゆく時代」には、当該期における生産と都市に関する六本の論文を取めた。

農業生産については、高橋一樹「畠田からみた十四世紀の農業生産」が、十五世紀の地域社会による大規模な畠田開発Ⅱ畠地の田地化の前段階に、十四世紀の個別経営による小規模な畠田開発を位置づける。そして、手工業生産や流通についても、中島圭一「中世的生産・流通の転回」が、律令国家の解体に始まる中世の商品生産と荘園制的流通について、その展開から解体に至るまでを跡づけ、十四世紀にターニングポイントを求める。

考古学の立場からは、まず村木二郎「擬漢式鏡からみた和鏡生産の転換」が取り上げる擬漢式鏡の生産において、十四世紀前半から中頃に京都の八条院町で行われていた段階では高い技術を維持していたのに対して、戦乱によって世紀半ばにこの地が荒廃し、職人たちが何処かへ移転（そしておそらく離散）すると、品質が低下してしまうことが明らかにされる。続いて、佐藤亜聖「石塔の定型化と展開」は、石塔の定型化の最初の画期を十三世紀における地域初期様式の形成にみるものの、その後の十三世紀第4四半期における畿内定型様式の成立を前提として、十四世紀に西日本各地で定型化様式が広範に確立して中世後期に続く安定した構造が完成する段階に最大の画期を置く。また、森島康雄「変革する土器様式」は、京都の中世土器編年の年代観を見直した上で、へそ皿の優越、赤土器・白土器の時代、土師器皿の法量分化などが始まり、瓦器碗・束播系須恵器鉢が消滅するという中世の前期と後期を分ける大きな変化が、鎌倉幕府滅亡と相前後してほぼ同時に起こったことを指摘する。

最後に古田土俊一「鎌倉の消費動向―陶磁器組成の変化を読む―」は、鎌倉出土の陶磁器を各遺跡の層位ごとに整

理・分析し、十二～十三世紀における鎌倉の都市的発展の過程と十四世紀以降の様相を実証的に提示するとともに、有力御家人と下層庶民とが混住する状況や、十四世紀前葉における輸入陶磁器の減少とその背景を論ずる。

以上の十九本の論文は、各々の視座と研究対象・フィールドに応じて重点の置き方は異なるものの、十二～十三世紀に発展してきた中世社会が行き詰まりを見せ、十五世紀以降につながる新たな芽が生まれる曲がり角としての十四世紀の様相を浮かび上がらせてくれている。果たしてこの芽が、私見のように中世の解体と近世の形成へと直結するものと言えるのかどうか、本書をきっかけに議論が深まれば幸いである。

目次

序 曲がり角の十四世紀——中世解体の萌芽を探る……………	中島圭一…………… 1
第1部 台頭する新たな力	
悪党のゆくえ——荘園領主の動向を中心に……………	高橋典幸…………… 11
海賊の跳梁と東アジアの政情……………	関 周一…………… 31
禅僧の数学知識と経済活動……………	川本慎自…………… 59
東国仏教諸派の展開と十四世紀の位相——律宗・禅宗・日蓮宗——……………	湯浅治久…………… 83
板碑造立の展開と武士団——陸奥国白河庄・石川庄の事例から——……………	七海雅人…………… 109
出羽の霊場と武士団——成生荘を中心に——……………	落合義明…………… 139
家論から見た十四世紀……………	坂田 聡…………… 165

第2部 創られる由緒と秩序

『中尊寺供養願文』の成立……………五味文彦…187

創りだされる神々の縁起——戦乱状況との関連で……………芥米一志…203

武家文書の転換点——「真壁長岡古宇田文書」を素材に……………呉座勇一…231

足利尊氏像と再生産される甲冑騎馬肖像画……………黒田智…249

室町幕府——権門寺院関係の転換点——康暦の強訴と朝廷・幕府……………大藪海…275

足利義満の笙と西園寺実兼の琵琶……………石原比伊呂…297

——十四世紀における公家社会の変容を考えるための一視角——

第3部 広がる富と変わりゆく時代

畠田からみた十四世紀の農業生産——畿内近国を中心に……………高橋一樹…323

中世的生産・流通の転回……………中島圭一…351

擬漢式鏡からみた和鏡生産の転換……………村木二郎…373

石塔の定型化と展開……………佐藤 亜聖……………391

変革する土器様式……………森島 康雄……………419

鎌倉の消費動向——陶磁器組成の変化を読む——……………古田 土俊……………457

あとがき……………487

執筆者一覧……………489